その後は，道徳特設への勢いが増し，「反改革の時代」に突入した。

### 3　戦後教育反改革期の道徳特設の実現とその後

1958（昭和 33）年版学習指導要領は，我が国の教育が終戦後の占領によって貶められたと感じてきた人々の期待を受け，教育の自律を回復する目的で成立した。その方向は，戦後新教育の改革に反対する「反改革」の動きとして，社会科の系統学習への大転換と合わせて道徳教育誕生が目玉となった。いわゆる小中学校の特設道徳であり，これによって週 1 時間「道徳の時間」が設置された。これは**政治主導の強権発動的で強引な教育改革**と見做すしかない。その趣旨が，設置前年の 1957（昭和 32）年 11 月文部省「道徳教育基本要綱」で述べられている。

> 一．趣　旨
> 　現在道徳教育は，社会科をはじめ各教科その他教育活動の全体を通じて行われているが，その実情は必ずしも所期の効果をあげているとはいえない。今後もこの学校教育の全体を通じて行う方針は変更しないが，現状を反省し，その欠陥を是正し，進んでその徹底強化をはかるために，新たに道徳教育のための時間を特設する。特設時間における道徳教育は，児童生徒の発達に応じ，日常生活の基本的な行動様式の理解，道徳的心情と道徳的判断力の育成に努め，他の時間における指導と相まって，道徳的実践力涵養をはかる。　（※下線：筆者）

文部省にとっては様々な圧力下の方向転換であった。今般の「教科化」にしても幾ばくかの圧力は否定できないが，この時とは比較にならないだろう。そして，「道徳の時間」特設から 5 年後，道徳教育の充実方策を再度審議した教育課程審議会答申が 1963（昭和 38）年 7 月に出された。

> 二．道徳教育の現状と問題点
> 　教師のうちには，一般社会における倫理的秩序の動揺に関連して価値観の相違が見られ，また道徳教育についての指導理念を明確に把握していない者がみられる。そこで，いわゆる生活指導のみをもって足れりとするなど道徳教育の本質を理解していない意見もあり，道徳の指導について熱意に乏しく自信と勇気を欠いている者も認められる。〈以下略〉　（※下線：筆者）

辛辣に教師の至らなさが指摘されているが，出発当初から教師たちに道徳教育の必要性への納得が得られていなかったという理由がはっきりしている。50 数年経った今般の「報告」にも類似の指摘があるが，当時の「やらされ感」なる不満が今日まで長く尾を引いていることは確かだろう。

### 4　道徳教育の改革は中学校への対応に特別な配慮を

この度の「道徳の教科化」の議論でもう一つ気になるのは，小中学校の区別が相変わらず弱いことである。道徳教育の停滞は，小学校に比して中学校に強く言える。中学校では，教科指導の中途半端な専門意識と多大の配慮を要する生徒指導の現実が，教科外指導への意欲を削いできた。

「報告」は，「指導内容の重点化」などは中学校に配慮がみられるが，教科にかかわる名称として「特別の教科」と呼称することは，こと中学校の教員に対する方策としては疑問である。それでは従前の「領域」と同様に軽視される危惧を覚える。中学校では，「教科」のみの名称の方がより効果を上げることができる。「道徳」をことさら「特別の教科」として特別な存在にすることは，活性化の面で期待は薄らぐ。可能ならば，2000（平成 12）年，小渕内閣の「教育改革国民会議」において，道徳に代わって中学校では「**人間科**」の教科設置案が出されたが，これが有効策である。

なお，道徳授業が教科と同程度の扱いになるなら，大学・教職科目「道徳の指導法」も「教科教育法」同様に 4 単位に増やす必要があるだろう。

## Ⅲ　大学・教職科目『道徳の指導法』の指導を通しての考察

### 1　教職科目において大学生に行った道徳授業とその成果

この章では，筆者自身が行った教職科目「道徳教育の研究」の授業実践について述べ，これからの望ましい道徳教育・授業に言及する。

まず，本科目の授業を通じての筆者の問題意識は次のことであった。

**大学生に通用し効果のある道徳教育**が可能ならば，**小中の児童生徒に相応しい道徳教育**の在り方が見えてくるのではないか。

すなわち，「大学生に実際に道徳授業を行ってみる」であり，その結果，判明したことが多くある。結論を先に端的に述べれば次のことである。

教職課程で学ぶ大学生のほとんどが，小中学校時代の道徳授業に対する肯定的な印象をもっていない。しかるに，本授業を通して道徳授業の内容に面白さを感じ，自分の為になる大切な授業であることを大学生になった今知ることができたと述べる者が多かった。このことは，小中学校時代の「徳目」の無理な教え込みに類する道徳授業が，その発達段階には合っておらず，また国・教委・教員の内容提示や指導方法等が適切ではなかったと判断できる。

すなわち，道徳教育もまた，他の専門教育同様，知的レベルが高い時期に学ばせれば，単純な指導法であっても，十分な成果を上げ得るのである。

## 2　教職科目「道徳教育の研究」の実践概要と結果の考察

以下は，実践した教職科目「道徳教育の研究」のシラバスである。

■教職授業科目名　「道徳教育の研究」　2年次配当，2単位
■テキスト　『中学校学習指導要領解説・道徳編』（文科省，日本文教出版，2008）
■授業内容
1　プロローグ（オリエンテーション，グループ協議「道徳教育の経験」）
2　道徳教育の意義（学習指導要領にみる道徳教育の在り方 ― 総説，目標）
3　道徳教育の現状（現在の生徒指導上の諸問題，現在の道徳教育の特質）
4　道徳教育の歴史（教育勅語，修身，特設道徳，心のノート，教科化論議）
5　道徳発達と道徳的社会化（ピアジェ，コールバーグ，デュルケイム等）
6　道徳教育と全教育活動（教科，総合学習，特別活動，日常の教育活動）
7　道徳教育の方法（価値伝達・価値注入，価値葛藤―モラルジレンマ）
8　道徳教育と学級経営（学級担任，学級・学年・全校の独自性と一貫性）
9　道徳教育の内容と授業構成①（学習指導案，自分自身，読み物資料）
10　道徳教育の内容と授業構成②（他の人とのかかわり，話し合い）
11　道徳教育の内容と授業構成③（自然や崇高なものとのかかわり，視聴覚）

12　道徳教育の内容と授業構成④（集団や社会とのかかわり，役割演技）
13　道徳教育と人権教育（人権・同和教育，いじめ・体罰，特別支援教育）
14　道徳教育と家庭・地域社会（家庭・地域社会教育力，しつけ，健全育成）
15　道徳教育の評価と課題（課題レポート講評，評価，新しい道徳教育）

本授業は，①道徳教育に関する「教職に必要な基礎・基本の内容」の伝達と，②大学生に対する道徳授業の効果の質的把握を意図したものである。その結果，「体験的・実感的ストーリー」の意義が浮き彫りとなった。

（1）第 1 回授業における学生・班協議の集約意見の概要（全 77 名）

| 班 | これまでの道徳教育の印象・経験 | これから求められる道徳教育 |
|---|---|---|
| A | 印象がない，先生の独断，行事関連の時間変更，感想を発信できるのはまれ | 日ごろからの 1 時間毎の取り組みが大切，もっと印象に残るような授業をすべき |
| B | 「心のノート」のみで，しかもあまり使用せず，模範的な話のみで飽きる | 新聞記事を使った授業，先生の負担があまりかからないで面白い授業にする |
| C | 著名人関連の資料，近所のお年寄り招へい，見え透いた内容の資料 | 道徳教育の意義について丁寧に話す，先生の力に限界があるので外部講師招へい |
| D | 覚えていない，綺麗事，新聞記事を使ったことがある | その意味・意義が分かるようにすべき，衝撃が走る資料を，自由に言える余裕のある授業を |
| E | 皆の前で発表する授業，ビデオを観る授業，感想文提出のみで全く共有化せず | 正解を求める授業にならない，言いたいことが自由に言える授業 |
| F | 身近に感じられない空疎な発想の資料，ぼんやり聞いていると終わる授業 | これからの時代はネットへの注意喚起を行う情報モラルの授業が不可欠 |
| G | 「心のノート」だけでなく，オリジナルテスト，聖書を使ったことがある | 生徒参加，生徒を感動させてやる気の出る授業，体験的な授業，外部講師招へい |
| H | 「心のノート」は綺麗事，日常と結び付けていない話題ばかり | 道徳は家で親からが自然では，先生は正論を言う必要なし，ディスカッションで考えさせる |
| I | 副読本や新聞記事を基に話し合う，道徳は教科ではないので適当にやっていた | いつまでも印象に残る授業を，実践的な経験を基にした心が震える感動的な話 |

| | | |
|---|---|---|
| J | 資料やビデオなど媒体を通すが思考回路がつながらない，授業がよく潰れた | 人ありきで指導者の質をもっと高めるべき，思考回路が明確になる授業を |

**【コメント】** これまでの道徳教育の印象は 9 割以上が希薄かつ否定的な見解。道徳教育のない高校生活 3 年を経ていることも印象を薄くしている大きな要因か。なお，筆者は「印象なし＝無益」と考えるのは早計ではないか，と疑問を呈した。

（2）授業の進め方の実際と授業全体の学生の省察結果

本授業の指導内容の 1 コマ分を例示しておく。第 13 回目の内容である。

**13　道徳教育と人権教育（同和教育，人権教育，いじめ・体罰，特別支援教育）**

(1) 前時授業に対するリアクション・ペーパーの概要―スライド 3 枚　〈15 分〉

(2)「道徳教育と人権教育」に関する講義・質疑応答―スライド 21 枚　〈35 分〉

(3) バズ・セッション［3～5 人］「これまでの 12 時間の授業で，いかに自分の道徳教育観などの考え方が変化したか」〈10 分〉→発表［3 人＝1 分／人］（巡回中にチェック）〈5 分〉

(4) 必ず感動させる話『50 年後』（コナン・ドイルの短編小説）―スライド 6 枚　〈15 分〉

Q「この話で生徒に何を伝えたいか」で 5 人に回答させる

(5) リアクション・ペーパー（RP）を記入後，解散　〈10 分〉

**【コメント】** 本授業で毎回重視したことは，授業の最終部で記入させたリアクション・ペーパーの分析である。筆者はそれを授業間で分析し，次時冒頭に紹介して主要な質問にも回答した。また，スライド（パワーポイント）活用，グループワーク，体感的・実感的ストーリー提示等，この教材研究は実に楽しく，学校教師の道徳授業の教材研究もかくあればとつくづく思う。しかし，この授業に効果を覚えるのは，本学の学生への授業という固有の条件があったことも事実であろう。

さて，授業全体の意見の代表的なものを以下に厳選した。

〔これまでの道徳教育・授業を振り返って〕
1　感動という感覚は何を置いても先ずは大切なものではないか。
2　良いと思う話を生徒と共有することは良いことだ。自分も貯めたい。
3　「道徳教育」と「道徳の時間」の区別が付いていなかった。
4　揺れる価値をムリに固定化すると生徒にフラストレーションが生じる。
5　教員が道徳に不熱心なのは教科偏重だからで，これを変える必要がある。
〔これからの道徳教育・授業を目指して〕
1　いじめの被害・加害の経験をもつ者こそ行える道徳教育がある。
2　教科化の前にこの授業のように道徳教育の課題の検討が必要である。
3　子どもが自分の情動を押さえるには道徳教育だけではムリではないか。
4　将来講義式の授業しかできず，参加型の授業ができないような気がする。
5　英語科は言語教育という特性上，道徳と関連させるのは難しいと悩む。
〔本授業を学んで〕
1　初めて「いじめる側が悪い」の姿勢でいじめられる子を守る気になった。
2　授業中に何か１回でも自分の内に電流が流れる瞬間が起こるといい。
3　デューイ「教育は経験の再構成」は自分も義務教育以来の経験に言える。
4　様々な教科等と結び付いてより大きな道徳的価値の獲得が可能になる。
5　ヴィトゲンシュタインは「上り切った梯子は捨てられなければならない」（『論考』）と述べているが，教員も生徒にとっての梯子であると思う。

**【コメント】**　これまでの道徳教育・授業を振り返って様々な問題点が見えてくる。また，これからの道徳教育・授業では，否定的なニュアンスが気になるが，課題意識は十分感じられる。本授業は，道徳教育の再評価に寄与したものと考えられる。

（3）教職科目「道徳教育の研究」の最終提出レポートの例

**［学生 1］　タイトル：**　豊かで柔軟な道徳教育のために
**主題設定の理由：**　中元先生から道徳教育について学び，学校の道徳の時間をもっと豊かでフレキシブルな時間にすべきではないかと考えた。
**本論〈箇条書き〉：**
○道徳の時間を柱にしつつ，その学びを他教科に応用させてつながりをもたせることができる。道徳教育の効果は，学校生活の秩序維持，整った風紀，いじめのない学校・学級の実現等，多方面において表れるものだから，道徳の授業に力を入れるべきである。（道徳教育は，心の豊かさを実現しようとするものだから，その効果が外面に出てくるか疑問に思うところがあったが，心